

# 留学期間と内集団同一視が内集団ひいきと黒い羊効果に与える影響

楊 嘉寧・井上 弥  
(2017年12月22日 受理)

Effects of the studying abroad and the scale of group identification  
on the black sheep effect and the ingroup favoritism

Jianing YANG<sup>1</sup> and Wataru INOUE

**Abstract:** Both the black sheep effect and the ingroup favoritism had been explained in terms of social identity theory, and had been associated with the scale of group identification. On the other side, the influence of studying abroad on identity had also been pointed out. This study is examined that (1) the relation between studying abroad and the scale of group identification; (2) effects of the studying abroad and the scale of group identification on opinion toward a person and a nation, to verify whether black sheep effect and ingroup favoritism occur to Chinese international students in Japan. Thirty-eight Chinese international students participated in this research. The research mainly revealed the followings: (1) the result of a Chi-Square Calculator showed that there is not a relationship between living abroad and the scale of group identification; however, (2) the result of ANOVA suggested that, for the people who study abroad longer, the black sheep effect and the ingroup favoritism probably did not appear, while the black sheep effect and the ingroup favoritism would occur on the people with higher group identification. So it can be concluded that the longer time for living abroad, the lower group identification probably.

**Key words:** group identification, ingroup favoritism, black sheep effect

**キーワード:** 内集団同一視, 内集団ひいき, 黒い羊効果

## 問題と目的

社会的アイデンティティ (SI) 理論では、人種や民族、国籍などの大規模の集団を社会集団 (social group) としており、その成立には、アイデンティティが最も重要な概念とされている。人は自分の所属する集団を内集団と認識し、そこから自らの社会的アイデンティティ (SI) を得ている。この SI は自己概念の一部であり、人は自己概念の優越性や安定性を保とうとしているため、自らの SI を維持、高揚しようとする動機に従って行動すると考えられている。

SI を高める現象としては、内集団ひいき (in-group favoritism) と黒い羊効果 (black sheep effect) があげられる。内集団ひいきは、内集団と外集団の比較時に、人は自分が所属する集団を好意的に扱い、内集団をひいきする傾向があること指

---

<sup>1</sup> 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期

す (Tajfel, Billig, Bundy, & Flament, 1971)。黒い羊効果は、内集団の優れた成員を外集団の優れた成員よりも高く評価し、逆に内集団の劣った成員あるいは逸脱した成員を外集団の劣った成員よりも低く評価することである (Marques, Yzerbyt & Leyens, 1988a)。劣った内集団成員の扱いに関して、両現象は一見矛盾する結論を導くかに思われるが、Marques & Paez (1994) は、黒い羊効果は内集団全体の肯定的価値を維持し、SI を維持するための動機的・認知的方略の結果であると指摘している。ここでの動機的側面とは、内集団に劣った成員が存在すると、内集団から得る SI が脅かされることになり、自己概念をポジティブに保つことが難しくなること、したがって、劣った成員については極めて低く評価して内集団から心理的に切り離そうとする動機が生じることを意味している。一方、優れた成員の存在は内集団全体の誇りとなり、SI を肯定的に保つことができるため、外集団成員より高く評価するとしている (Marques, et al., 1988a)。また、黒い羊効果は認知的な面も作用していることは、参加者に内集団・外集団の全体評価や内集団・外集団の優等生・劣等生の割合推定をさせた実験で検証されてきた (Marques, et al., 1992; 松崎・本間, 2003)。その結果、内集団と外集団では、優等生と劣等生の分布に差があることから、両現象が矛盾せずに SI 理論から説明できることが示された。

内外集団への評価を扱う際には、人が自分の所属する集団と自己とを同一視する作用を指す内集団同一視 (group identification) が調節変数に相当している。集団同一視高群のみで黒い羊効果が生じることはいくつかの研究により示され (Branscombe, Wann, Noel, & Coleman, 1993; Biernat, et al., 1999)、内集団同一視は黒い羊効果に対する効果があると評価されている。

ところで、近年国際化が進むとともに、海外へ留学する人が増えている。大学以降に留学をする学生は、能動的アイデンティティが確立されている可能性が高い (末弘, 2006) ため、母国を内集団、ホスト国を外集団としていると考えられる。これに対し、異文化接触の経験が人のアイデンティティの揺らぎ・変容に影響を及ぼすという主張も見られる (塘, 2010; 中川, 2013; 塩入, 2006)。また、外集団との接触時間の長さにより外集団の文化規範への認知について、徐々に身に付けていくという説とそれに反論する説の両方が出されており、見解は一致していない。これらの知見を踏まえ、異文化環境にいる留学生たちは、如何に自らのアイデンティティを維持しながら外集団であるホスト国へ適応できるのかは、注目を集めるテーマの一つである。この両立を達成するには、従来の研究においては、大学からの取り組み、社会的サポートについての検討を多く行われてきた (周・深田, 2002; 田中, 1998; 譚, 2013)。また、留学生自身の感情については、自尊、ストレス (柳・松田, 2011; 一二三, 2006)、行動については接触の量と質 (張, 2007; Ward & Kennedy, 1994) が取り上げられて検討されてきた。しかし、留学生自身は、内集団、外集団に対してどのように評価しているのかといった認知の面では検討が十分にされているとは言い難い。そこで本研究では、異文化と接触する留学期間が内集団同一視に影響を及ぼすのかを検討し、また、留学期間と内集団同一視の視点から、内外集団・内外集団の人を捉える際に内集団ひいきと黒い羊効果は発生するかを確認することを目的とする。

## 方法

**調査協力者・時期** 異文化との接触時間の長さにより、調査対象を一ヶ月以内の短期留学生と二年間以上の長期留学生に分けてそれぞれ質問紙調査を実施した。短期留学生に対しては、2017年8月に、H大学で日本語日本文化研修の授業中に一斉形式で質問紙を配布した。長期留学生に対しては、2017年11月に協力者を募集し、個別形式で質問紙を配布した。有効回答数短期24部、長期14部の合計38部を分析の対象とした。

**質問紙の構成** まず、内集団条件 (中国) と外集団条件 (日本) を設け、「好ましい中国人 (日本人) をイメージしてください」および「好ましくない中国人 (日本人) をイメージしてください」という形で人物を設定した。次に、各提示人物のイメージは、林 (1978) の特性形容詞対尺度を用い、当てはまる程度を7段階で尋ねた。また、人物の好ましさを、誠実さ、親しくなりたい程度、優秀さ、人気の程度の5つの項目につき7件法で尋ねた。さらに、集団全体に対して、「どの程度好ましい人々だと思いますか」「どの程度誠実な人々だと思いますか」といった形で、好ましさを、誠実さ、親しくなりたい程度、優秀さ、人気の5つの項目について7件法で評定させた。最後に、Karasawa (1991) の日本語版集団同一視尺度を用いて、調査対象者の中国に対する集団同一視の程度を回答させた。ただし、本研究では、日本で留学している中国人留学生を調査

対象と設定しているため、「あなたは自己紹介するときや会話の中などで、自分が中国に属していることによく触れる方ですか、ふれないほうですか」という項目については、本人が意図的に触れなくても聞き手は分かると考えられるため削除した。残りの 11 項目について当てはまる程度を 7 件法で回答を求めた。

## 結果と考察

### 1. 内集団同一視と留学期間との関連

留学期間に伴い内集団同一視の程度は変化するかどうかを確認するため、短期留学生と長期留学生それぞれの内集団同一視尺度の 11 項目の合計得点を算出し、両者の差について  $t$  検定をしたが、有意な差は見られなかった。次に、内集団同一視尺度の平均値 (58.37) を基準に、内集団同一視の高群低群に分け Table 1 に示した。この Table 1 を基に、留学期間による内集団同一視の高群低群の人数に違いがあるかをみるため、 $\chi^2$  検定を行ったが、有意な差は認められなかった。これらのことから、留学で異文化との接触時間は増加していくにもかかわらず、母国への内集団同一視は簡単に変化しないことが明らかになった。本研究では、2 年間以上に留学していた学生を異文化接触時間が長いと設定したが、内集団への同一視を変化させる期間としては十分とは言えないのだろう。外集団に好意的であるかどうかは、内集団から得たアイデンティティの変化とも繋がっていること、外集団に好意的であればあるほど、内集団へ気づき、そして混乱を招くという指摘 (末弘, 2006) を考慮すれば、より長期な留学生を対象に、ホスト国への態度の変化を検討する必要性が示唆される。

Table 1 留学期間による内集団同一視の高群低群の人数の相違

	留学期間	
	短期留学生	長期留学生
内集団 同一視 H	10	8
内集団 同一視 L	14	6

Table 2 留学期間による集団への評価の条件別平均値 (SD)

	短期留学生		長期留学生	
	外集団	内集団	外集団	内集団
好ましさ	5.50(1.10)	5.88(0.85)	4.57(0.94)	5.14(0.86)
誠実さ	5.50(1.22)	5.75(0.85)	4.93(1.27)	4.93(0.92)
親しみ	5.71(1.00)	5.75(1.03)	4.64(1.08)	5.00(0.68)
優秀さ	5.67(0.87)	5.88(0.90)	5.14(1.17)	4.50(0.76)
人気	5.58(0.78)	5.46(0.98)	4.57(0.85)	4.71(0.83)

### 2. 留学期間が内集団ひいき現象に及ぼす影響

留学期間、内集団・外集団別に、「好ましさ」、「誠実さ」、「親しみ」、「優秀さ」、「人気」の 5 項目の平均値と標準偏差を示したものが Table 2 である。この Table 2 を基に、各項目の評価が、長期留学生と短期留学生、内集団と外集団によって異なるのかを検討するため、留学期間×内・外集団の 2 要因の分散分析を実施した。その結果、いずれの項目についても、留学期間の有意な主効果が見られ(好ましさ:  $F(1, 36)=9.70, p<.01$ ; 誠実さ:  $F(1, 36)=6.04, p<.05$ ; 親しみ:  $F(1, 36)=9.98, p<.01$ ;

優秀さ:  $F(1, 36)=15.68, p<.05$ ; 人気:  $F(1, 36)=10.93, p<.01$ ), 留学期間の短い方が, 外集団に対しても内集団に対してもより高く評価していることが示された。また, 「好ましさ」については, 内・外集団の主効果が有意で ( $F(1, 36)=6.94, p<.05$ ), 外集団よりも内集団を高く評価していた。さらに, 「優秀さ」については, 留学期間と内・外集団の交互作用が有意であった ( $F(1, 36)=4.69, p<.05$ )。この交互作用について, 下位検定を行った結果, 内集団で留学期間の単純主効果が有意で ( $F(1, 36)=23.04, p<.01$ ), Figure 1 からわかるように, 内集団に対する評価は短期留学生の方が長期留学生より高かった。

内・外集団の好ましさ, 内集団である母国に対して高いことから, 留学生でも内集団ひいき現象が確認された。しかしながら, 内・外集団の優秀さについては, 短期留学生が一貫して内集団を肯定的に評価したのに対して, 長期留学生は, 評価次元によっては, 外集団をより高く評価していることが明らかになった。すなわち, 評価次元によっては内集団ひいき現象が発生しないことが示された。

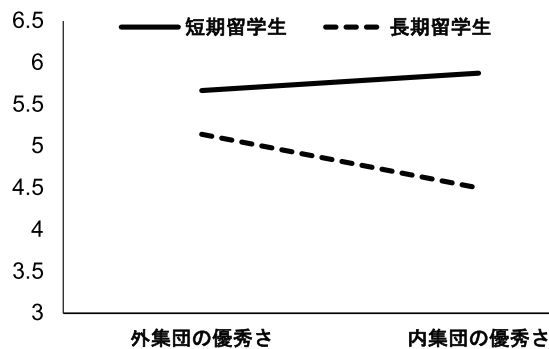


Figure 1 留学期間による集団の優秀さの評価

### 3. 留学期間が黒い羊効果に及ぼす影響

留学期間が黒い羊効果に及ぼす影響をみるために, まず, 17 特性形容詞対の因子分析 (最尤法・プロマックス回転) を行った。スクリープロットや因子の解釈可能性を考慮し, Tale 3 に示したような 3 因子解を採用した。第 1 因子は, 「人の悪い—人のよい」「憎らしい—可愛らしい」「感じの悪い—感じの良い」といった形容詞対の負荷量が高く, 「評価性」とした。第 2 因子は, 「自信のない—自信のある」「非社会的—社会的」「無気力な—意欲的な」といった形容詞対の負荷量が高く, 「積極性」とした。第 3 因子は, 「親しみにくい—親しみやすい」「近づきたい—人懐っこい」「不親切な—親切な」といった形容詞対の負荷量が高く, 「親近性」とした。内的—貫性を検討するために  $\alpha$  係数を算出したところ, 評価性で.92, 積極性で.80, 親近性で.83 と満足できる値が確認された。

留学期間, 内・外集団, 当該集団に属する好ましい・好ましくない人物ごとに, 人物印象 3 因子 (評価性, 積極性, 親近性) 及び評価 5 項目 (好ましさ, 誠実さ, 親しくなりたい程度, 優秀さ, 人気の程度) の得点を算出した。留学期間が黒い羊効果に及ぼす影響をみるために, 各得点を従属変数とし, 留学期間 (短・長) と対象人物の好ましさ (好ましい・好ましくない) と所属集団 (外集団・内集団) の 3 要因分散分析を行った。その結果, いずれの得点に関しても, 対象人物の好ましさの有意な主効果が見られた (評価性:  $F(1, 36)=163.24, p<.01$ ; 積極性:  $F(1, 36)=37.37, p<.01$ ; 親近性:  $F(1, 36)=101.88, p<.01$ ; 好ましさ:  $F(1, 36)=304.85, p<.01$ ; 誠実さ:  $F(1, 36)=66.12, p<.01$ ; 親しくなりたさ:  $F(1, 36)=182.00, p<.01$ ; 優秀さ:  $F(1, 36)=93.81, p<.01$ ; 人気:  $F(1, 36)=81.62, p<.01$ )。いずれも好ましい対象人物への得点が高くなっていた。

評価性の得点については, 所属集団の主効果が有意であり ( $F(1, 36)=7.67, p<.01$ ), 外集団に所属している人物への評価は内集団に属している人物より高かった。しかし, この結果では対象人物の好ましさなどではこのような差が見られなかったため, 黒い羊効果は十分確認できなかった。

親近性の得点については, 留学期間と所属集団の交互作用 ( $F(1, 36)=14.83, p<.01$ ) 及び, 対象人物の好ましさと所属集

Table 3 形容詞対の因子分析の結果

形容詞対	F1	F2	F3
人の悪い—人のよい	.847	-.134	.096
憎らしい—可愛らしい	.730	-.127	.291
感じの悪い—感じの良い	.711	-.038	.299
軽薄な—重厚な	.706	.196	-.280
軽率な—慎重な	.667	.176	-.098
短気な—気長な	.631	-.014	.072
責任感のない—責任感のある	.583	.135	.037
生意気な—生意気でない	.537	-.101	.195
心の狭い—心の広い	.529	-.006	.342
消極的—積極的	.423	.250	.177
自信のない—自信のある	.013	.823	-.151
非社会的—社会的	-.063	.718	.221
無気力な—意欲的な	-.064	.637	.077
卑屈な—堂々とした	.227	.480	.103
親しみにくい—親しみやすい	.011	.107	.914
近づきたい—人懐っこい	-.038	.002	.561
不親切な—親切な	.415	.036	.550
因子間相関	F1	.656	.715
	F2		.470

団の交互作用 ( $F(1, 36)=4.49, p<.05$ ) が有意であった。この留学期間と所属集団の交互作用について下位検定を行ったところ、短期留学生における所属する集団の単純主効果 ( $F(1, 36)=6.76, p<.05$ ) 及び長期留学生における所属する集団の単純主効果 ( $F(1, 36)=4.28, p<.05$ ) が有意で、Figure 2 からわかるように、外集団に所属する人の親近性に対して短期留学生は高く評定し、内集団に所属する人の親近性に対して長期留学生は高く評定していることが明らかとなった。次に、対象人物の好ましさと所属集団の交互作用について下位検定を行ったところ、好ましくない人物で単純主効果が有意で ( $F(1, 36)=5.95, p<.05$ )、Figure 3 からわかるように、内集団の好ましくない人に対する親近性の評定は外集団の好ましくない人より高いことが示された。これら結果から、長期留学生において黒い羊効果は発生しないことが明らかになった。対象人物が好ましい人であるかどうかに関わらず、長期留学生は内集団の人に高い親近感を持っていることは、集団関係や集団バイアスより、長期滞在で母国や母国の人が愛しいという個人の感情・精神の次元の問題になっているのではないだろうか。この可能性について、今後留学生の精神状況を把握しながらさらに検討していくことは必要であろう。

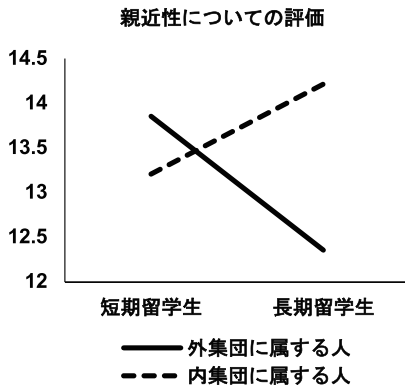


Figure 2 親近性の評価における留学期間と所属集団の効果

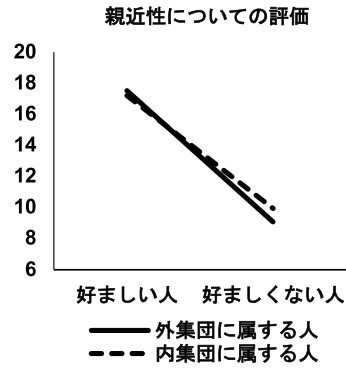


Figure 3 親近性の評価におけるターゲット人物の好ましさと所属集団の効果

好ましさの得点については、対象人物の好ましさと所属集団の交互作用が有意であった ( $F(1, 36)=6.33, p<.05$ )。下位検定の結果、好ましくない対象人物で所属集団の単純主効果に傾向がみられ ( $F(1, 36)=3.97, p<.10$ )、Figure 4 からわかるように、内集団に属する好ましくない人に対する評定は、外集団に属する人物より低い傾向が見られた。

優秀さの得点については、所属集団の主効果 ( $F(1, 36)=5.77, p<.05$ )、対象人物の好ましさと所属集団の交互作用 ( $F(1, 36)=8.75, p<.01$ ) が有意であった。この交互作用について下位検定を行ったところ、好ましくない人物において所属集団の単純主効果が有意で ( $F(1, 36)=8.41, p<.01$ )、Figure 5 からわかるように、内集団に属する好ましくない人物に対する評定は外集団に属する人物より低いことが示された。

これらの結果から、好ましくない内集団成員に対してより低く評価するという点では、黒い羊効果が確認された。しかしながら、もう一つの特徴である好ましい内集団成員に対してより高く評価するという点では、黒い羊効果は確認されなかった。

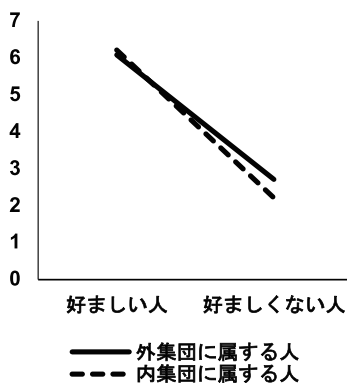


Figure 4 好ましさの評価におけるターゲット人物の好ましさと所属集団の効果

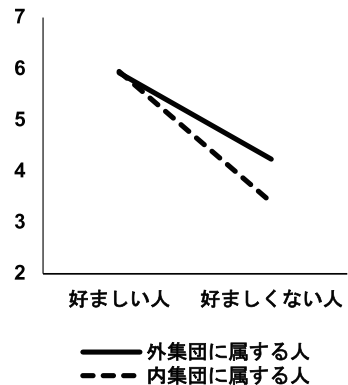


Figure 5 優秀さの評価におけるターゲット人物の好ましさと所属集団の効果

#### 4. 内集団同一視が内集団ひいきと黒い羊効果に及ぼす影響

内集団同一視が集団への評価（好ましさ、誠実さ、親しくなりたい程度、優秀さ、人気の5項目）に及ぼす影響をみるために、内集団同一視の平均得点を基準に高群低群に群わけした。内集団同一視高・低群、内・外集団別に、好ましさ、誠実さ、親しみ、優秀さ、人気の5項目の平均値と標準偏差を示したものがTable 4である。このTable 4を基に、内集団同一視の高低と内・外集団の2要因の分散分析を実施した。その結果、「好ましさ」については、内・外集団の主効果 ( $F(1, 36)=8.66, p<.01$ ) 及び、内集団同一視高低と内・外集団の交互作用 ( $F(1, 36)=6.91, p<.05$ ) が有意であった。そこで、下位検定を行ったところ、内集団における内集団同一視の高低の単純主効果が有意で ( $F(1, 36)=7.45, p<.01$ )、Figure 6 からわかるように、内集団同一視が高い留学生は、内集団である母国への評価が有意に高かった。また、「誠実さ」については、内集団同一視高低と内・外集団の交互作用が有意であった ( $F(1, 36)=4.51, p<.05$ )。そこで、下位検定を行ったところ、内集団同一視高群における内・外集団の単純主効果に傾向がみられ ( $F(1, 17)=3.33, p<.1$ )、Figure 7 からわかるように、内集団同一視が高い留学生では、内集団への評価がより高い傾向がみられた。しかし、「親しくなりたい程度」「優秀さ」「人気」については、有意な差は見られなかった。これらの結果から、内集団に対する評価は、「好ましさ」と「誠実さ」の2側面で、集団同一視が高い人ほど内集団を高く評価するという内集団ひいきが生じたことが明らかになった。

Table 4 内集団同一視による集団への評価の条件別平均値(SD)

	内集団同一視 L		内集団同一視 H	
	外集団	内集団	外集団	内集団
好ましさ	5.20(1.32)	5.25(0.97)	5.11(0.90)	6.00(0.69)
誠実さ	5.60(1.23)	5.35(1.14)	4.94(1.21)	5.56(0.70)
親しみ	5.35(1.39)	5.35(1.14)	5.28(0.83)	5.61(0.78)
優秀さ	5.75(0.97)	5.45(1.00)	5.17(0.99)	5.28(1.18)
人気	5.20(1.01)	5.10(1.02)	5.22(0.88)	5.28(0.96)

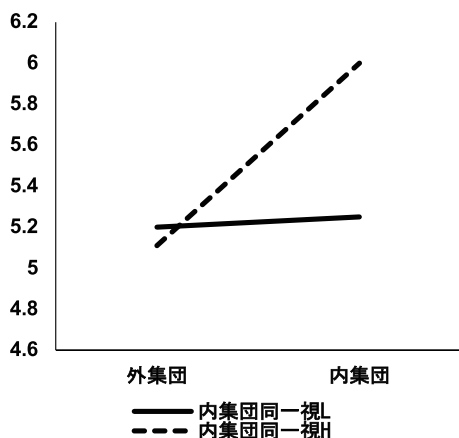


Figure 6 内集団同一視による集団の好ましさの評価

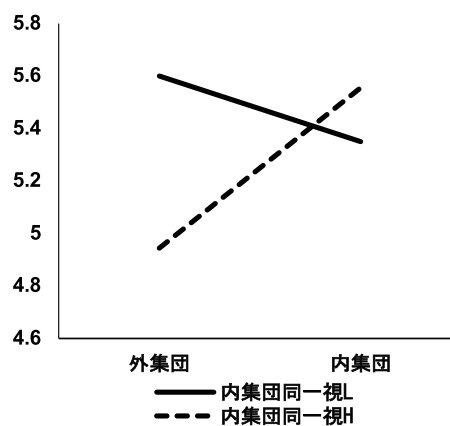


Figure 7 内集団同一視による集団の誠実さの評価

次に、内集団同一視が黒い羊効果に及ぼす影響をみるために、3因子（評価性、積極性、親近性）及び5項目（好ましさ、誠実さ、親しくなりたい程度、優秀さ、人気の程度）の得点を従属変数とし、内集団同一視の高低と対象人物の好ましさ

所属集団の3要因分散分析を実施した。その結果、いずれの得点に関しても、対象人物の好ましさの有意な主効果が見られた（評価性： $F(1, 36)=182.49, p<.01$ ；積極性： $F(1, 36)=42.45, p<.01$ ；親近性： $F(1, 36)=107.16, p<.01$ ；好ましさ： $F(1, 36)=333.82, p<.01$ ；誠実さ： $F(1, 36)=68.91, p<.01$ ；親しくなりたさ： $F(1, 36)=100.52, p<.01$ ；優秀さ： $F(1, 36)=187.18, p<.01$ ；人気： $F(1, 36)=91.24, p<.01$ ）。いずれも好ましい人物の評価が高くなっていた。

評価性の得点については、所属集団の主効果が有意で（ $F(1, 36)=7.89, p<.01$ ）、対象人物の好ましさと所属集団の交互作用に傾向がみられた（ $F(1, 36)=3.51, p<.10$ ）。下位検定の結果、好ましくない人物において所属集団の単純主効果が有意で（ $F(1, 36)=9.24, p<.01$ ）、Figure 8 からわかるように、内集団に属する好ましくない人への評定はより低かった。また、好ましさの得点については、内集団同一視と対象人物の好ましさと所属集団の2次の交互作用に傾向がみられたので（ $F(1, 36)=3.88, p<.10$ ）、好ましくない人物について、内集団同一視の高低×所属集団の2要因分散分析を行った。その結果、Figure 9 からわかるように、内集団同一視高群の人は、内集団に属する好ましくない人に対してより低く評価していた（ $F(1, 36)=7.11, p<.05$ ）。優秀さについては、所属集団の主効果（ $F(1, 36)=5.59, p<.05$ ）及び、対象人物の好ましさと所属集団の交互作用（ $F(1, 36)=8.10, p<.01$ ）が有意であった。下位検定したところ、Figure 10 からわかるように、内集団に属する好ましくない人への評定はより低かった（ $F(1, 36)=8.03, p<.01$ ）。

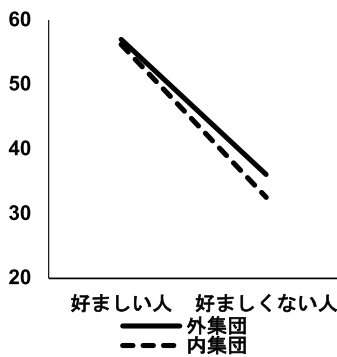


Figure 8 評価性の評価における対象人物の好ましさと所属集団の効果

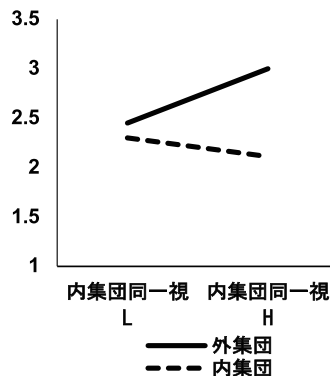


Figure 9 好ましさの評価における所属集団と内集団同一視の効果

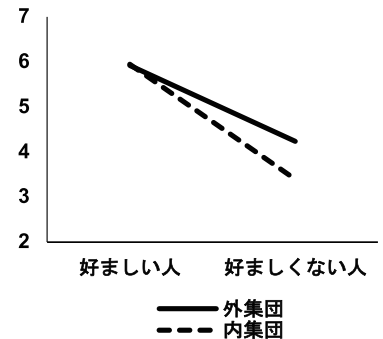


Figure 10 優秀さの評価における対象人物の好ましさと所属集団の効果

これらの結果から、好ましくない内集団成員をより低く評価するという点で、黒い羊効果は確認された。しかしながら、好ましい内集団成員に対してより高く評価するという積極的側面では、黒い羊効果は見られなかった。これは、好ましくない内集団成員が低くされるが、好ましい人物においては内集団成員のほうが高く評価されない傾向がみられるという大石・吉田（1988）の知見と一致している。これは、消極的な側面での「黒い羊」は、内集団から逸脱した特殊な存在（大石・今野, 2000, p.111）だからといえよう。すなわち、優れた内集団成員はSIを高揚できるが、内集団のSIを保つには、特殊な存在である劣った内集団成員は排除しなければならない対象となっているため、逸脱に関連した評価次元では黒い羊効果がより発生しやすいと考えられる。

## まとめ

本研究の目的は、異文化と接触する時間が内集団同一視への影響、および異文化接触時間と内集団同一視により内集団ひいきと黒い羊効果は発生するのかを明らかにすることであった。結果として、異文化接触時間による内集団同一視の高低に相違がなかったことが分かった。また、異文化接触時間により内集団ひいき及び黒い羊効果を見る際、接触時間が長いほうの長期留学生においては、内集団ひいきが発生しない場合、さらに黒い羊効果と逆方向の効果が出た場合が見られた。一



方、内集団同一視の高低により内集団ひいき及び黒い羊効果を見る際、一部の評価次元のみであるが、両現象の発生は内集団同一視の高い人において確認された。このことから、異文化接触時間が増加していくうち、内集団同一視は低くなる可能性が示された。今後の研究で、異文化との接触時間をより幅広く扱い、試合などSIへの脅威が有る場面で、内集団と外集団への評価の検討は必要であろう。

## 引用文献

- 大石千歳・今野裕之.(2000).黒い羊効果と内集団ひいき：ラベル提示と記述提示を用いて. 筑波大学倫理学研究 22,105-122.
- 大石千歳・吉田富二雄.(2001).内外集団の比較文脈が黒い羊効果に及ぼす影響—社会的アイデンティティ理論の観点から.心理学研究,71,445-453.
- Branscombe, N. R., Wann, D. L., Noel, J. G., & Coleman, J. (1993). In-group or out-group extemity: Importance of the threatened social identity. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 19(4), 381-388.
- 林文俊.(1978). <資料> 対人認知構造の基本次元についての一考察.
- 一二三朋子.(2006). 異文化接触と親の教育方針がエスニック・アイデンティティ及び自尊心に与える影響—日本人学生と中国人留学生の場合. 文藝言語研究 言語篇, (49), 61-81.
- Karasawa, M. (1991). Toward an assessment of social identity: The structure of group identification and its effects on in - group evaluations. *British Journal of Social Psychology*, 30(4), 293-307.
- Marques, J. M., & Paez, D. (1994). The 'black sheep effect': Social categorization, rejection of ingroup deviates, and perception of group variability. *European review of social psychology*, 5(1), 37-68.
- Marques, J. M., Yzerbyt, V. Y., & Leyens, J. P. (1988). The "black sheep effect": Extremity of judgments towards ingroup members as a function of group identification. *European Journal of Social Psychology*, 18(1), 1-16.
- Marques, J. M., Robalo, E. M., & Rocha, S. A. (1992). Ingroup bias and the 'black sheep'effect: Assessing the impact of social identification and perceived variability on group judgements. *European Journal of Social Psychology*, 22(4), 331-352.
- 松崎友世・本間道子.(2003). 内集団ひいきにおける認知的・動機的方法としての黒い羊効果. 社会心理学研究, 18(3), 180-191.
- 中川典子.(2013). 日本人留学生の異文化接触とアイデンティティ. 流通科学大学論集—人間・社会・自然編, 25(2), 53-75.
- 塩入すみ.(2006). 留学生のアイデンティティ確立の過程—台湾人短期留学生の事例から. 京都橘大学研究紀要, (33), 192-172.
- 末弘美樹(2006)『日本人留学生のアイデンティティの変容』 大阪大学出版会.
- Tajfel, H., Billig, M. Bundy, R. P. & Flament, C. 1971 Social categorization and intergroup behaviour. *European Journal of Social Psychology*, 1, 149-177.
- 田中共子.(1998). 在日留学生の異文化適応. 教育心理学年報, 37, 143-152.
- Ward, C., & Rana-Deuba, A. (2000). Home and host culture influences on sojourner adjustment. *International Journal of Intercultural Relations*, 24(3), 291-306.
- 柳佳慶, & 松田英子.(2011). 在日中国人留学生のストレスと異文化適応に関する研究—文化受容態度と自己効力感からの分析—.
- 周玉慧, & 深田博己.(2002). 在日中国系留学生に対するソーシャル・サポートに関する研究. 社会心理学研究, 17(3), 150-184.